

7 田安門

田安門は、西草深町の静岡浅間神社むかひに建っていました。この敷地には浅間神社の新宮家の役宅が置かれていましたが、1869年、版籍奉還により静岡藩知事に任命された田安家出身の徳川家達公が私邸として譲り受けました。この門は、その遺構であり、家達公の出身に因んで「田安門」と通称されてきました。

家達公は1871年に東京に帰住しましたが、この門は現地に残され、1887年、静岡尋常中学校の校舎の正門となりました。1900年には師範学校女子部に引き継がれ、1924年には西草深児童遊園地となりましたが、この門は残存。

1958年、静岡市立高等学校（静岡市葵区千代田3-1-1）に移築され、向学のシンボルとして今日に及んでいます。



8 壮士墓

1868年4月19日、榎本武揚が率いる幕府軍艦8艦は、品川沖から館山に脱走。そのうち咸臨丸は8月20日、悪天候のため浦賀沖で座礁して漂流し、下田港を経て9月2日に清水港に入港。下田港から通報を受けた大総督府は富士山丸、武蔵丸、飛龍丸を清水港に向け、9月18日に咸臨丸を砲撃。咸臨丸に残っていた十数名は討死にし、官軍は死体を海に投げ捨てたまま、咸臨丸を曳航して引き揚げてしまいました。

死体が湾内に漂ったまま数日が経ち、清水次郎長は夜、舟を出して7人の死体を収容して向島の松の根もとに埋葬し、盛大な法要を営んで、悲運の戦士を供養しました。

山岡鉄舟は次郎長の心意気をたえ、向島の埋葬箇所に自ら揮毫して「壮士墓」を建てました。



9 咸臨丸記念碑

清見寺（静岡市清水区興津清見寺町418-1）の境内に建つ「咸臨丸記念碑」には、大鳥圭介による「骨枯松秀」の篆額、永井尚志による約3000字の碑文、榎本武揚による「食人之食者死人之事」（人の食を食む者は、人の事に死す）徳川の禄を食んだ咸臨丸乗組員は、徳川に殉じた」という『史記』の一節が刻まれています。

榎本が率いた旧幕府艦隊は、咸臨丸を失った後、1868年10月26日に箱館の五稜郭を占領。しかし、翌年5月18日に降伏。榎本は投獄されますが、1872年に放免となり、北海道開拓使、駐露特命全権公使を経て、大臣を歴任。1887年4月17日に清見寺で記念碑の除幕と法要を営んだ時は、第一次伊藤内閣の通信大臣に就任していました。



○ 新門辰五郎
しんもん たつごろう



1800（寛政12）～1875（明治8）

カザリ職人・中村金八の子として江戸に生

まれ、輪王寺宮の家臣町田仁右衛門の養子となる。鳶仕事をし、浅草下谷を管轄する十番組火消頭取となる。輪王寺宮が浅草に隠居した際、新しい門を守らせたことから新門の辰五郎と呼ばれる。慶喜公に見出された辰五郎は、上洛した慶喜公を警護し、鳥羽伏見の戦いで金扇馬印を守り、江戸へ持ち帰った。慶喜公とともに駿府に移住。静岡の町火消しをつくり、頭取に就任。玉川座の復興にも尽くし、東京へ帰って死去。娘は慶喜公の愛妾。

○ 清水次郎長
しみずの じろちやう



1820（文政3）～1893（明治26）

清水港の船頭・三右衛門の三男に生まれ、米

屋甲田屋・山本次郎八の養子となる。家業に精を出すのがやがて侠客の世界に身を投じ、海道一の親分として声名をはせた。幕末には倒幕軍から沿道警備役を命ぜられ、旧幕臣10万人の駿府移住の際は寺・神社等の宿泊所を探した。清水港で官軍に砲撃された咸臨丸の死者を手厚く弔った。慶喜公の投網のお供は次郎長だった。侠客時代に鍛えた情報力交渉力を発揮し、富士山麓の開墾、清水港の開港、相良油田等の新事業に取り組んだ。